名古屋大学東洋史研究報告　四十六号　二〇二二年三月発行

批評と紹介

Akinobu Kuroda, *A Global History of Money*

前村佳幸

本書は、『中華帝国の構造と世界経済』（名古屋大学出版会、一九九四年）、『貨幣システムの世界史〈非対称性〉をよむ』（初版二〇〇三年・増補新版二〇一四年、岩波書店刊）に続く、黒田明伸氏の単著であり、Routledge Explorations in Economic History シリーズの一環として刊行された。本書では、近年、著者が国際的に推進してきた一連の研究成果をベースにして、世界史上の貨幣事象を多岐にわたり広く深く捉えつつ、その構造に踏み込み、その理解のための新たな論理的枠組みを提示している。本書については、改題の上で岩波現代文庫に収録された『貨幣システムの世界史』（岩波書店、二〇二〇年）の「あとがき」に著者による言及があり、一読すれば、誰もが本書の卓絶した構想と意義を窺い知ることができる。

評者にとって経済史は専門外であり、およそ有意義な批評を行う資質はないけれども、本書が前著『貨幣システムの世界史』において示された成果をどのように発展させているのか、それを読み解くことに努めた。前著では、貨幣と制度的枠組みとが相関して成立する各国の「支払協同体」と貨幣の「地域流動性」との対応関係が個別的に図示されていた（第六章）。本書にて著者は、貨幣の様態と交換のあり方とを結び付けた、応用性の高い「交換の四象限（よんしょうげん）」の概念を提示する。これに依拠し、前著の結論にて「市場の非対称性」として位置づけられていた、貨幣事象と社会制度との具体的関係や歴史的展開を「貨幣の補完性」の観点から再構築したのが本書である。

本書の内容を日本語で示すと以下の通り、序論と結論を含

め七章から成り、補遺では外部から供給される貨幣が地域内で滞留する事象について、図と式を示し説明している。

序　論
前編　交換が生み出す現地貨幣
第一章　小農、市場と貨幣
第二章　貨幣滞留と階層化された市場
後編　世界史における貨幣の脱地域化
第三章　貨幣の脱地域化の発動―一三世紀、モンゴル帝国が遺した意図せざる影響
第四章　多様化する世界と階層化―一六世紀における銀の大移動と三つの道筋
第五章　通貨の国家的統合―一九世紀、国際金本位体制の舞台裏
結　論　社会的循環としての貨幣
補　遺　環流しない貨幣に関する流体的モデルと等式
索引

序論冒頭で著者が行っているのは、『ニコマコス倫理学』における交換に関するアリストテレスのテーゼの否定である。著者の視点は、世界中の民衆の生活と密着した貨幣を介した財と労働の交換に広く注がれており、その上で多様で歴史的な政治的社会的諸制度がそれぞれの貨幣のあり方と強く関係していることを解き明かそうとしている。そのためには、工業化以前の社会における農民の経済活動を正しく捉えることのできない観念との決別が必要なのである。

そして、独自の「交換の四象眼」の概念が図示される。これは、交易距離の違いと使用される貨幣の額面の違い、決算の手段、およそ誰でも参加できる匿名的な交易、その場で決済する一過性の対面取引、取引の連続性を前提とした信用決済の差異に着目し、交易のあり方と貨幣ないしその他の決済手段とを組み合わせたものである。

第Ⅰ象眼は、匿名的な当事者間の遠隔地交易であり高額で可搬性の高い貨幣を用いる。第Ⅱ象眼は、指名された間柄での遠隔地交易であり、手形や証書の交換により決済を行う。第Ⅲ象眼は、指名された間柄での近接的な取引であり、帳簿上の差引に基づき決済を行う。第Ⅳ象眼は、匿名的な者同士が近接的な交易を行い少額貨幣を用いる。証券類と帳簿は貨幣ではないが、計算単位としての貨幣が必須である。ただし、貨幣が支払い・価値尺度・価値貯蔵の手段を具有するという現代的常識にとらわれず、商人と農民とがそれぞれ異なる形態・単位・機能の貨幣を使い分けた史実に照らして、四

象眼では単一の計算単位を前提としない。むしろ、秤量銀の両と銅銭の文が並存した一九世紀の中国が第Ⅰと第Ⅳ象眼に該当するように、異なる貨幣が補完的に展開すると想定される。第Ⅲは少額金属貨幣がほぼ欠如している状況下にあり、第Ⅱと第Ⅲ象眼は現金に強く依存していない。

自由で匿名的な交易は、冒険的商人による貿易だけではなく、農民同士でも行われる。また、遠隔地交易が常に現金の一括払いになるとは限らない。自由自在な交易か継続的で確実な交易を指向するのか、その分岐点は、農民に対する、その時々の国家的社会的制度と密接に関連している。ここで著者は、ヒックスの互酬と指令による「慣習経済」「統制経済」という非「市場経済」の概念や金属貨幣の欽定性を示しながら国家ではなく専業的な「商人的経済」が真の貨幣を生み出すという主張に疑問を呈する（八頁）[1]。それは、生産と消費とを結ぶ図式であって、多様な交易のあり方を考慮していないからであり、巡りめぐって後で財を得るという贈与の慣習よりも口頭誓約や定期市など即座に行われる取引形態が世界史的に顕著だからである。また、グレシャムの「悪貨が良貨を駆逐する」という格言については、両者が同時には両立しないという前提を指摘し、実際には機能を異にして補完的に並存していることを述べる。また、大不況下の米国のように、農民の貨幣需要の季節的偏差が深刻な金融逼迫を引き起こしていたことに注意を促す。その上で、交換における確実性と柔軟性の選択が世界史における貨幣事象を分析する上で重要な観点として明示される。

第一章においては、工業化以前の定期市など在地の市場における農民間の自主的な交易と貨幣との関係について述べ、モラル・エコノミー論については批判的である。なぜなら生存を図る農民の互酬的関係を強調するあまり、個々の農民の自発的な取引と貨幣との関係性を看過できないからである。二〇世紀前半の山西省太原県黄陵村の事例では、定期市が農民が半日で往来できる範囲に成立し、対面で直接売買する場所であり、その決済はその場の現金払いであった。この時期、農繁期における「換工」慣行が報告されているが、太原近郊の農村に生きた劉大鵬の『退想斎日記』（一八九〇年～一九四二年）にある通り[2]、毎日所定の場所で人手を確保し労賃を毎日貨幣で支払うというのが実態であった。

さらに、十日ごとに二の日と七の日に市が立った、山東省寧清県大柳鎮の統泰という商号をもつ商人が遺した帳簿類について、道光一〇年四月（一八三〇）の「出入流水賬」（嘉

慶・道光「統泰号賬簿」の一部、中国国家図書館文津閣所蔵）を分析する。その取引は日用品が主で相手の名が同じ年に二度出て来ることはほとんどない。市の立つ日に取引額が突出する傾向が表示される。この時期にも農民の副業としての「小販」が存在していたとみなせる。統泰号が「小販」に前貸し掛け売りすることがあっても、次の市の日までが限度であったという。取引総額における信用供与の程度は低く、低利子で特定の者との取引関係を持続させようとする指向は顕著でない。その百年後の日本人による調査報告によると、河北省、山東省、陝西省そして江南における農民について、現金取引と居住する集落内よりも市場での販売を好み、同じ集落の住民同士の借金を避け、売った者から買わないなど得意先をもたず、貸し借りを作らない意識が強かったという。総じて、中国農民は予期せぬ事態に柔軟に対応できるよう、特定の相手との継続的取引をあえて避けていたといえる。統泰号の検討によって、こうした農民の行動規範が遅くとも一九世紀前半に遡ることが確実となった。

中国では遠隔地交易と在地での交易とで異なる貨幣を用いており互換性がなかった。これを踏まえると、安徽省屯溪県（徽州南部）における米価動向（一八二一～一八六〇年）のように（中国社会科学院経済研究所収蔵「金山祀会収支簿」）、アヘン戦争前の十数年間に一年あたり「二百万～一千万両」もの銀が流出したからといって、[3] 各地域の物価に直接作用しなかったことも十分理解できる。

農民の交易に対するスタンスにおいて工業化以前の中国と日本には差異がある。西日本では、農繁期でも日雇い農業労働者はおよそ見出せない。山城の国の事例では、『退想斎日記』と異なり、雇われた者の名前も記され後払いなので継続的な関係が窺われる。農民と商人の関係では、中国のような自家製の綿糸や綿布を直接売り出す農民と売買益を重視する商人との取引と異なり、和泉の商人の場合、集めた棉花を河内の農民に前貸して枵糸（かせいと）を受け取るサイクルを構築しており、棉花栽培農には干鰯を前貸していた。こうした継続的な貸借は帳簿に記され、その差引によって精算しており、手形が交わされ現金の比重は低くなっていった。なお、村民が他の村民のため日銭で働くことは忌避され、結（ゆい）など村民間の互酬的協業が普遍的であった。こうした日中の慣例を比較すると、日本では農民と商人とが市場を介さず直接取引し相互の信用によって実際に貨幣を使用する機会を最小限にしており、中国では分散した貨幣実物によってどこでも小規模な市

場が成立しており、きわめて対照的な構造といえる。

次に近世イングランドを比較の対象に加える。地方都市や領主館の訴訟記録によると、地域内の各層で代金・賃金・賃貸料をめぐり日常的に各人の信用に依拠した取引が行われていた。第三者立ち会いでの口頭の約束のみで一ポンド以下の金額でも成立したようである。一七世紀後半は小規模債務をめぐる訴訟のピークであった（この過程を経て、地域の誰からも取引相手にされなくなることを恐れ、債務履行が常識となっていったのだろう）。さらに遺産目録を見ると、動産の大部分が手形・証券類や帳簿上の貸しであり、現金の占める割合はきわめて少なかった。市場に関しては、一三世紀の人口増加に伴い一日で往来できる範囲で増加したが、一六世紀には大幅に淘汰されていく。こうして、都市民の指名による取引が主流となり、現金使用の頻度も低くなっていった。

近世における変化は、一七世紀以降の日本においてより顕著である。「四日市」は全国的に展開し、そこでは小商人が農民から商品を買い取る場であった。幕藩体制下、領国支配の集権化が進み、藩政の中枢である城下町の居住を認められた商人が交易上の特権を得た。定期市から都市への交易の移行は日本全体で生じ、越後地方を除き、[4]一九世紀後半までに定期市は姿を消した。信濃の飯山藩では仲買人が定期市で匿名的な相手と穀物を売買していたが、一八世紀後半になると、藩の米穀商が他藩の特定商人と為替による先物取引を行うようになった。この為替には流通性があり、一九世紀には穀物以外の商品も対象になった。継続的な取引による債権に比して少ない現金という点で、秋田藩の漆商高橋家のように（『秋田県史　資料』近世編下）、近世日本の商人の資産内容も英国と類似している。日英両国は、定期市から商人の信用に依拠した取引に移行し、資産の蓄積が貨幣依存を下げ、特定の相手との継続的取引を指向する点も共通する。それは、山東省のように時代が下るにつれ、そして開港により交易が活性化する状況下で定期市が増加した中国と対照的である（三三頁）。

以上の検討を踏まえると、継続的な取引と確実性を指向する日本は第Ⅲ象眼にあたり、一過性的な取引と柔軟性を指向する中国は第Ⅳ象眼に該当する。両者それぞれ内部の取引関係を図示して外部から貨幣が流入する線を引くと、濃密な信用関係を張り巡らした在地社会では結節点は極小であり、匿名的で現金により少額な交易を即座に完了する在地社会では結節点は多く複雑という構造が明瞭となる。

第二章においては、国家発行の少額貨幣が一度地方に交付されると、ほぼ中央に環流しないという事象を糸口に考察する。まずは現代の英米の調査から、少額通貨が末端で滞留して回収率が極端に低いことを示す。四川省阿壩県の一括出土埋蔵銭（一八七〇年代窖蔵）では乾隆通宝の割合が多く、最も発行額の多い銅銭が最も多く滞留していたことが分かる。このような滞留を悪貨によって駆逐されたと見なすのは妥当でない。アーサー・スミスが観察したように、小商店でも銅銭の集計と整理に多くの時間と労力を費やした。国家は新規供給よりも回収に能力の限界を感じるだろう。

世界大恐慌当時にヒックスは、人々がタンス預金して有価証券を購入しなかったことを非合理的選択と評したが、これは人々の貯金指向ばかり見て意図せず通貨が滞留することを看過している（四五頁）。滞留している貨幣の大部分が直ちに死蔵となったのではない。いつでも誰でも遣える確信があるからこそ自宅ないし安全な所（地中）で保管されたのである。この種の貨幣の急激な減少が、物資の欠乏よりも深刻な影響を地域に及ぼすことがある。明末の泉州において私鋳銭を放任することで米価暴騰が沈静化した経緯を伝える『泉南雑志』の記事、一九二九年における湖北省北部老河口の市鎮仙人渡（戸数三〇〇）の三六業者が各自紙製貨幣を発行していた事例は（五三頁）、少額貨幣不足の状況下、自律的な第Ⅳ象眼の交易が展開していたことを示す。

次に統泰号の帳簿「道光二十一年銀出入」（中国社会科学院経済研究所）を史料とし、同年十月初一日（一八四一年一〇月一三日）における統泰号と取引相手との決算を分析すると、四種類の銀が確認できる。そのうち通し番号の付されたタイプの宝銀（五〇両）が統泰号と三つの取引先との間で動いており、伝票記帳日と支払日の間の精算のために銅銭で利子が支払われていた。また、「道光二十一年八月出入流水賬」（中国国家図書館文津閣所蔵「統泰号賬簿」）には、銅銭建て（文）と銀建て（両）の項目に区分され、十月初一日における統泰号の収支が記されている。その日一日の総取引額は二千貫（銀換算で七〇〇両）に及ぶが、二千文の商品を受け取り同額の油を渡したように売買が同時で同額であれば容易に相殺できた。さらに、複数の買い手からの銅銭建ての支払いは宝銀で受け取っている。この銀で統泰号は売り手に対して銅銭建ての支払いを行っている。この状況から商人が現金使用を避け、複数の売り手買い手を介在させて取引の相殺をシステム化していたといえる。基本的には同額の取引を利

用して各自で伝票を帳簿に転記して収支を管理し、現金は差額調整や利子に限って使用された。このように、取引の阻害要因を緩和するため銅銭と銀の貨幣機能を自律的に分化させていたのである。

長崎に拠点を置き俵物を台湾と中国東南沿海部に輸出していた福建商人の泰益号は、地元の十八銀行および横浜正金銀行との信用関係により決済を行っていた。泰益号の帳簿も中国式であるが、後払いを前提としている（長崎歴史文化博物館所蔵「泰益号関係史料」）。これと異なり、統泰号と取引相手との間には当日中に決算を行い均衡を保とうとする強い意思があった。このような商人間の売買の相殺による決済は、「過賬」という簿記制度に由来するというより、現金が少なく、貸出や為替交換をしてくれる銀行も存在しないという金融状況の所産といえる。なお、商人が信用による指名取引よりも匿名的な手形の交換を重視するのは、決済の後回しを忌避するからであり、第Ⅲ象眼に類似するが、実際には第Ⅳ象眼の範疇にある。仮想的な貨幣の額面を単位とした相殺取引は物々交換と明確に区別すべきであって、中国では農民だけでなく在地の商人も第Ⅳ象眼を指向していた。

ベルギー植民地時代のコンゴでは、カヌーと魚を売買する貨幣が異なっていたので、漁師は二つの貨幣流通の中で生活していたが、このような状況は為政者によるものではなく自生的に成立した。一九三〇年の遼東湾沿岸の営口では、新旧奉天票（省銀元）、銀貨（ドル）、銀塊（両）、朝鮮銀行券（金建て）、横浜正金銀行券（銀建て）から銅銭（文）に至る雑多な貨幣が使途により並存していた（六一頁）。その交換レートは毎日変動したので、大商人は単一貨幣に全面的に依存せず、帳簿の差引で対応していた。銀塊には〝虚銀両〟として簿記上の仮想的単位が付与されていたが、その数値（両）は混在する貨幣のなかで最も中立的であり、現金の急な欠乏による影響を防ぐ役割を果たしていた。貨幣実体と分離して仮想的な単位を付与された通貨は一九世紀後半以降のオスマン帝国各地でも展開したが、ここでも「一国一通貨」制度を当然とする西洋人には無秩序で異様な状態としてしか認識できなかった（六二頁）。

以上のように、本書前編においては、日本人の調査報告のみならず、新旧中国知識人の記録や商人の帳簿を史料として検討し、近世の日本とイギリスそして世界各地の事例を吟味することによって、工業化以前の農民と貨幣との密接な関係と在地商人間の決済に端的に表れる構造上の差異を明らかに

している。つづく本書後編は時系列的な展開を軸として叙述される。その画期的着想として刮目すべきは、従来の世界経済史や世界システム論における西欧主体の一六～一七世紀ではなく、一三～一四世紀におけるモンゴル帝国による大統合を貨幣の世界史の起点としていることである。

第三章においては、元朝の「投下」制度の歴史的意義が高く評価される。それはチンギス・ハンの子孫同士の共存連携をはかる、彼らの政体であるウルス相互で税収を分かち合うという中国歴代王朝には存在しなかった財政システムであり、中国から西方の諸ウルスに銀が移送されることになった。これにより、貿易では西方から中国に銀が持ち込まれているにもかかわらず、モンゴル帝国独自の制度が銀の逆流をもたらし、その支配圏外の西欧にも直接的な影響を及ぼしたのである。その好例が一三世紀第4四半期と一四世紀第1および第3四半期におけるイングランド王室による空前の銀貨発行額である。その間、谷をなしているが、各期のピークは年間三万キログラムを越える。毛織物産業の盛行を背景に代価として持ち込まれた銀を原料としている。この時期、ヨーロッパの銀保有量はバルト海や地中海を経た中国からの流入によって増大していた。ヨーロッパ域内で銀山開発が進展したという史実がない以上、この共時性の指摘は等閑視できない。黒海に注ぐドニステル川右岸部とカルパチア山脈との間にあるキプチャク汗国の衛戍地跡からの銀塊を調査した著者の所見も中国銀塊が大量に持ち込まれていたことの有力な傍証となっている（八三頁）。

元朝が接収した中国国内の銀塊 sycee は揚州元宝（五〇両、約二キログラム）に改鋳され、西方に持ち出された元宝は somo に改鋳された。ヴェネツィア商人はリンネル生地をキプチャック汗国の首都サライなどに持ち込み、somo を入手していた。純度の高い somo 一個は約二〇〇グラムで元宝の十分の一であり、北イタリアのフローリン金貨五枚と等価とされたので、五〇フローリン金貨が中国では銀一錠（五〇両）に換算される。西方ではイル汗国の銀貨 asper 二枚はシチリア王国鈔定銀貨一枚と交換でき、asper 二〇〇枚は五〇フローリンに換算される。ハンザ同盟に加入し毛皮をキプチャック汗国に供給していたノヴゴロドのグリヴナ銀塊は約二〇〇グラムであった。雲南産出の銀もまた西方に流れ、デリー・スルタン朝の銀貨ルピーの原料となった。表面が銀で中身は銅のディルハムと異なり、元宝は改鋳しても変質しないので各地に浸透していった。このように、ユーラシア東西

の高額貨幣が互換性と計数性をもつようになり、中国銀一錠に換算できる単位をもって銀が西欧に流入した。

中国側では、銀がなくても元朝発行の中統鈔によって通貨がまかなわれ、活発な商業活動からの徴税を支えた。財政難による紙製貨幣の大量発行がインフレを引き起こし、元朝支配の動揺をもたらしたというのは、「グレシャムの法則」や「貨幣数量説」を援用すると、因果関係として理解しやすい。しかしながら、南宋と同じく元朝の紙製貨幣が高い額面でしか発行されず、地方の酒店などでは木片が貨幣の代用であったという実態から（九五頁）、第Ⅰ象眼と第Ⅳ象眼の交易とが円滑に結びついていない構造が窺われる。元朝統治下、銅銭はほぼ発行されず使用も禁止され、銅銭は海外に輸出された。一二世紀後半から宋銭を大量に輸入した日本でも大仏や梵鐘の原料に転用された（八七頁）。貨幣としても代銭納により全国的に普及し、定期市が盛行し貫高制へと移行する。唐物や宋銭の代価として日本からは硫黄やモンゴル王侯が好む被服装飾用の金が輸出された。

モンゴル帝国の興隆・崩壊と関連する事象として、中世の日本とオランダの市場の増加と減少に着目し、政治システムによる貨幣供給が地域市場の形成を促したことが看取される（九一頁）。諸地域間の共時的な相関性を重視してきた著者ならではの所見である。モンゴル帝国崩壊後、インド・西アジア方面の陶磁器輸出がほぼ途絶し、西方では銀の流入が止まり、各地域内の交易にシフトしていった。西欧の都市や統治者は、財政難のため市民からの借財に頼るようになった。ケルンの場合、中下層の市民で終身年金に出資する者も多かった。イングランドではイタリア商人によって、毛織物の代金がローマ教皇への送金と相殺された。ベルギーでは両替商の間で決済指示書が往来し、リヨンの大市が相殺の軸となるなど、遠隔地交易においても都市間の帳簿上の差引勘定が行われ、大商人も金銀に依存しなくなった。王権は欽定貨幣を使用させようとしたが、十分供給できなかった。百年戦争中、英国王が毛織物商に現金による納税を要求して貿易不振を招いたように、短期間の現金決済にこだわる公権力の影響によって、第Ⅱ象眼と第Ⅲ象眼の連携が阻害されていた。

明朝では現物経済に執着してあまり精銭を発行せず、宝鈔も回収を意図せず円滑に流通しなかった。そして、福建南部の漳州で改鋳された私鋳銭（模造宋銭）が日本に大量流入するようになった。この時期、西欧では穀物価格が下落傾向にあったが、一五世紀中に銅銭が流通していた日本では安定し

ていた。悪銭（並銭）は通用銭として、精銭（良銭）は基準銭として補完的に機能したので、精銭の収納を望む領主側では撰銭に対する禁令を出したが奏功しなかった。

近世中国では大量の精銭が発行されても充足することはなかった。これに対して、民間では短陌慣行や銭票が普及し、東・南シナ海域にも銅銭遣いが広がっていった。一六世紀になると、石見銀山に引き続きポトシ鉱山の銀塊が流入するようになり、明朝発行の紙製貨幣「宝鈔」の代わりに秤量貨幣として銀が遠隔地交易に適した高額貨幣の地位に即き、江南では折糧銀（金花銀）徴収が始まり、銀経済移行の条件が揃うも、銅銭をめぐる状況は変わらなかった。一回での決算を重視する中国社会では、国家には期待せず、串銭のごとく素材は同じでも多様な貨幣を創出して対応していった。銀を介した海外貿易・遠隔地交易は第Ⅰ象眼の取引を活性化させたが、中国と西欧では、在地での決済において、それぞれ第Ⅳ象眼／第Ⅲ象眼が主流となる。この分岐は社会や制度のあり方の違いを反映している。

第四章では、一六～一七世紀における大量の銀産出が世界各地にもたらした変化について検討する。それが西欧における物価を高騰させ大きな影響を及ぼしたことは〝物価革命〟として教科書的常識となっている。しかし、石見銀山の銀が海外貿易に専ら使用されたように（一〇七頁）、西洋人が大量の銀を入手したからといって、ヨーロッパ域内で盛大に遣ったとは限らない。インドや東南アジア、中国での物産買付の代価に充当されたのであり、銀が流入したアジアでは国内通貨として機能したが物価は急騰していない。つまり、貨幣供給と物価高騰との因果関係の根拠は薄弱なのである。一六～一八世紀の西欧では穀物の商品価値が高まり商人によって地域外に持ち出され、間歇的に社会不安を惹起した。中国では明末から康熙年間にかけて銀流入が激減したが、[5] 投機により穀物価格は不安定であった。その後、海外貿易や遠隔地交易が活性化すると「米貴」が為政者にとって重大問題となった。この類似性こそ注目に値する。

ヨーロッパ域内において簿記による取引が社会各層で普及し、金属貨幣への依存度が低くなっていた状況とインド・中国への銀の大量流入には関連性があり、中国では銅銭と秤量銀の補完的関係が確立していった。ただし、西洋の銀貨は中国では銀塊にインドではルピー銀貨に改鋳され、ドルが東西間で循環するには至らなかった。こうして、一六世紀における銀の大量移動は東西における貨幣のあり方を次の段階へと

変化させたのである。

国家財政のあり方も貨幣と密接に関連している。フェリペ二世が国庫破産宣告したように、集権化の進んだ近世西洋諸国では財政赤字が恒常化しており、フッガー家は貸付金が回収できず没落する。こうして、国家への借款は公債が主体となる。民間では取得した債券を自己の抵当にしたので、地域間交易の決済手段となり、戦列艦の建造など長期的事業に必要な資金調達も円滑にした。そして、決済の場も首都に集約されるようになった。

貴金属の貨幣に替わり重要性を増していったのが、紙製貨幣である。イングランド銀行の紙幣は高額面で硬貨の発行量も少なかったので、イギリスでは住民の預金を集めるカウンティバンクが額面一ポンドの銀行券を発行した。この紙幣は地域の資金需要の季節性に対応し、納税にも使用できた。藩札は藩内の特産物と交換され、その売上金を準備金とし、年貢として回収したので貨幣として機能した。これら紙製貨幣の流通は特定地域内に限定されていたが、遠隔地交易による高額貨幣の流出入による地域内の通貨変動を緩和する役割を果たしていた（第Ⅱ象眼と第Ⅲ象眼の補完性の確立）。中国では、王朝による紙製貨幣は秤量貨幣としての銀の大量流入により姿を消した。そして、市鎮や県城内の商工業者自身による少額な紙製貨幣が私的に発行され、その顔が利く狭い範囲で授受されていた。ここで注目すべきは、貨幣素材の実用性希少性も公的支払い手段の機能も欠いた状況下で少額貨幣が自生的に創出されていたことである（第Ⅰ象眼と第Ⅳ象眼とが補完する構造）。

なお、資本主義の展開と並行するモノカルチャー経済と関連して、先述の二つの道筋とは異なる第三のあり方として現出した、商業的独占体による民衆の法貨入手と購買統制を指摘し、南北戦争後のルイジアナにおけるシェアクロッパー、中南米やネグロス島の農園労働者の待遇、ニジェールにおける通貨操作などが示される。

第五章においては、開港後に農作物輸入のために海外から中国に持ち込まれる銀貨の流通実態、銀貨（袁世凱銀元）から銀行券へと幣制改革が進められた清末から民国期に至る中国、そして西洋諸国から中東・東西アフリカに供給され長期間流通したマリア・テレジア銀貨に焦点をあて、銀行券が貨幣として一国の中央から在地社会に至るまで浸透する過程を検証する。本章では、〝世界政策〟に基づき行動する列強ではなく、工業化により世界的に需要の高まった農作物を生産

するアジア・アフリカ・南米など〝周辺〟から捉えることによって、貨幣には国家が供給する外来的なものと在地の市場で創出される自生的なものとがあり、それらが空間的に水平的かつ垂直的で多層的な市場において補完的に機能する構造とその実態・変容とが論証されている。

ここでは、イギリス側の公文書を博捜し、紅海両岸にて流通したマリア・テレジア銀貨（ＭＴＤ）と供給者としての西欧諸国の関与について掘り下げている。エチオピア帝国ではＭＴＤが実質的な法貨であった。首都における毎月のＭＴＤ／スターリングの交換レートとロンドンにおける銀相場との相関関係を見ると、後者が下落するとレートも下がっているが、一九三三年は別である。これはコーヒー豆の輸出が順調な時期には国際的な銀価格と連動し、大量の在庫を抱えた時期には交換が減って相場の影響を遮断し、ＭＴＤの安定性が保たれたことを意味する。そして、英軍進駐後も品位の高いスターリングは通用せず、驚くべきことに一〇リラ紙幣がＭＴＤと貝貨との間で選択的補完的に流通していた。

次に究明されるのが、市場の垂直的な階層性についてである。ＭＴＤは国を越えて授受されたが、最上層のポンド圏との貿易ではスターリングやルピーが必要であり、在地の取引では布地・銅貨・塩棒そして小銃の実包が貨幣として機能した。上海には日本の貿易用銀貨が持ち込まれ、福建省（福州・アモイ）を経由して贛江を下り江西省の吉安と九江の物産と交換されたが、灯油など輸入品の代価として上海に環流する額は少なかった。さらに、ＭＴＤの流通圏と同じく各地域の階層性をもった市場では異なる貨幣が同時に必要であった。ＭＴＤも各地で滞留したので、第二次大戦中、英国はインドのルピーを大量に転用して供給する側となった。本書では、多層な市場と流通する貨幣の関係が図示されている。こうした市場を統合し、季節的な貨幣需要の逼迫を克服する諸条件が揃わない限り、農民が「一国一通貨」制度に容易に包摂され得ないことは明らかである。

中国では自国銀行が銀行券を発行するようになり、一九二〇年代に銀行と銭荘など在地の金融業者との間で「領用」制度が成立し、「暗記券」という兌換券が交わされるようになる。一九三五年の「改元廃両」以降、法幣の発行後も五元以下の額面の貨幣供給がなかったことから、法幣と並行して各地で雑多な現地通貨がなお補完的に流通しており、法幣（元）と銅銭（文）の交換レートは各地で異なっていた（上海市档案館収蔵史料）。統一指向の通貨政策に対して在地

では自律的に貨幣を流通させていたのである。法幣は第Ⅰ象眼の取引はともかく第Ⅳ象眼の領域では十分浸透していなかった（一八七頁）。それでも紙幣が広く用いられる方向に導いた意義が評価される（一九〇頁）。

結論において、地域内の流動性を支えてきた現地通貨が退場し脱地域化へと進んだ現代の〝常識〟となっている「グレシャムの法則」や「貨幣数量説」という観点から歴史的な貨幣事象や物価動態を理解することの問題点や限界を指摘し、それを克服する「社会的循環としての貨幣」の論理を確認していく。

一三世紀以降の銀経済の展開により活性化した第Ⅰ象眼の交易は、各地の第Ⅱ～第Ⅳ象眼の取引に影響を及ぼした。具体的には、手交用少額貨幣を柔軟に創出する地域、域内の信用を組織化する地域、そして域内の交易（第Ⅳ象眼）を抑圧する独占体が表れる。この三つの道筋の並行過程で、一四世紀～一六世紀の欧州では、第Ⅰ象眼の海外交易が縮小したが、次の銀経済の勃興までに第Ⅱ象眼の広域的交易が展開した。そして、国際的金本位制は、アジアなどの小農経済から地域内における第Ⅳ象眼の貨幣循環を吸収し、二〇世紀の初からは国際的為替相場と連動する法貨（紙幣と補助硬貨）が普及し、自生的に創出される現地通貨は非合法的存在と見なされるようになる。しかし、それが「交換の四象眼」に該当する交換の多様性や貨幣の補完性が完全に過去のものとなったことを意味するわけではない。中央銀行の管理さえ適切であれば安全な貨幣が供給されるという〝常識〟も疑わしい。著者がその旨主張する背景には、国際的な対外収支決済と地域内の流動性とを統合した統一幣制は前者の均衡を社会に強要し、その影響を自律的に緩和する仕組みが失われているという現状認識がある。

悪貨（私鋳銭）が大量に存在するから物価が上がったのではなく、良貨（精銭）が商人に選別され持ち出されたことが原因であったり、豊作でも少額貨幣の急激な減少が物価急騰の引き金となったりするなど、「貨幣数量説」では説明できない史実がある。元朝の一文人官僚は米価が二倍以上になった原因として「小鈔」の欠如を挙げる（一九七頁）[6]。「貨幣数量説」におけるフィッシャーの方程式 MV = PT では、V（貨幣流通速度）が制度や社会状況による影響を受けることは想定していない。また、多種の貨幣が補完的に機能していることも鑑みれば、M（貨幣供給量）は単一ではあり得ず、一国一通貨が貫徹していない世界に完全には

当てはまらない。

しかも、ヒックスの所説とは逆に地域外部の要因による貨幣の供給が地域内に市場の成立を促すこともある。市場ではたとえ顔馴染みであっても、一度限りの取引が繰り返される。それには手交貨幣が不可欠であり、それが市場の存続や性格を規定する。また、貨幣の変化が交易そのものを変えることもある。砂金ブームに湧くも少額決済手段を欠くコロンビア・メディシンの住民に対する当局の通貨政策、農地改革により自生的な交易が活性化したボリビアの変化は、民衆の生活向上にとって、自由な市場参加（第Ⅳないし第Ⅲ象限）の機会、地域内外で授受される多種の額面を持つ貨幣が必要不可欠であることを示している。

最後にアダム・スミスの貨幣を「一国の公道」に喩える卓見について、街道から脇道に至る様々な道が補完的に結びついている本質に即して理解すべきと言う。どのように貨幣が組み合わされるかによって、社会のあり方もまた決まってくるのである。

以上、広範かつ多岐にわたる本書について、評者の理解できた範囲内で紹介を試みた。次に若干の卑見を述べて責を果たしたい。序章において、第Ⅰと第Ⅲあるいは第Ⅱと第Ⅳの組み合わせについては言及されていないが、前近代では史実が検出されないからだろうか。第一章と第二章は、東アジア小農経済と深く関連している。また、第三章には五代宋初以降の通貨政策と海域アジア交易という地域特有の論点があり、ここで論及することは評者の能力を超えている。そこで、むしろ無知な領域について述べたい。

第四章では、著者はケインズを引き「利益革命」と記している（一一九頁）。該当箇所には「利益インフレーション」とあり、それは英仏に起こったという[7]。両国では資本集積が進み、東インド会社などによる海外進出が本格化し、高い利潤の追求がなされたことは否めない。ただし、銀流入が賃金の相対的低下をもたらし資本家に有利となった点について因果関係は必ずしも立証されていない。この点、著者は『中華帝国の構造と世界経済』の序にて懐疑的に言及していたけれども、地代・賃金・資本をめぐる枠組みはなお提示されていないように思われる。

一七世紀のフランスでは、銅貨鋳造が活発となり、日本産の銅も原料に充てられたという。同時期、日本では寛永通宝、つづいて中国では乾隆通宝が大量に発行された。日中に共通するのは、対外戦争は眼中になく内政が最優先されてい

たことである。他方において、一六～一八世紀のイギリスでは、銅貨の供給に無関心であったという（一一八頁）。その背景として、スペイン・オランダ・フランス相手の覇権争いが連続し、軍需に回していたことが推測される（陸軍国フランスは兵士に支給する少額硬貨を重視）。中国でも明代における青銅製大砲の需要と銅銭供給との関係が注目される。

それはさておき、「交換の四象眼」の概念は、著者が世界中の貨幣と取引をめぐる事象を適切に位置づけるために切り開いた本書の核心である。それだけに徹底的な検証を要する。そこで藩札をめぐり一つ確認しておきたい。藩札が領民の在地における匿名的で少額な交換（第Ⅳ象眼）を可能にしたことは首肯できる。ただ、札元として参与した商人は特定の信用ある者であって、藩にとって世代を越えた商人の経営の持続性が前提であっただろう。したがって、大名と豪商との関係による遠隔地交易は匿名的ながら高額な交易（第Ⅰ象眼）には該当せず（一三五頁）、どちらかというと第Ⅱ象眼と第Ⅳ象眼の組み合わせが基調となるのではないだろうか。

アルゼンチン・カナダには、西欧向け小麦の一大輸出国という共通性があるが、前者では大都市の銀行が国際的相場に連動した貨幣供給を行い、後者では国内の銀行支店網が広がったという。評者は、繭の集荷における日銀のように（一四三頁）、カナダでは第Ⅱ象眼の貿易と近接的な取引の決済（第Ⅲ・第Ⅳ象眼）を統合する金融システムが成立したと解したが、両国の分岐まで踏み込んで叙述することは、近代の日中と同じく、貨幣と社会との関係を示す上で必要であったように思われた。

「貨幣数量説」をめぐるMV＝PTについては、岸本美緒氏により、四要素がそれぞれ相互に関係し得るという論点が示され、さらに清代の物価研究において貨幣的要因と実物的要因とを分離した理解をはかる「経済変動論」が展開していたことが指摘されている。[8] これに対して著者は、貨幣供給の減少が物価上昇を引き起こした史実を直視して「貨幣数量説」を扱っている。このような事例は広く確認されるのだろうか。また、Vが物価Pに甚大に作用することは肯定されるのだろうか。前著（三〇四頁）にて言及されていた「粘性」はVとどのように関連づけられるのだろうか。そして、PがT（取引量）に及ぼす影響は、物価が単一の貨幣の計算単位によって表示される以上、あり得ないのだろうか。

アダム・スミスは「道路」用地の節約と転用を唱えていた。[9] そこから、有限の土地（金銀）に縛られないというイメージ

で貨幣の脱物質化の必然性を示すために取り上げる論者もいることだろう。著者は一八世紀後半の西欧における金貨の多種混在という史実を示し、貨幣の補完性の観点からスミスの言説を活かしている。本書の上梓によって、著者の見識が世界中の読者と共有されることを祝したい。

総じて、本書は世界経済を牽引したユーラシア東西の構造的な差異を明確にしつつ、密接な相互関係を描き出しており、開港後の中国などにおける貨幣事象を混沌としてしか認識できなかった欧米中心の世界史像を超克している。なにより、貨幣を主題とした省察を通じて、著者は、貨幣の補完性が完全に過去のものとなったという結論を導くのではない。管理通貨制度の下で同一額面としても、形態によっては機能に差異が生じ得る。本書の読者は、複雑に連鎖する金融システムに組み込まれた、今後の世界の貨幣を柔軟に捉える知見も得ることができる。本書は、経済史・貨幣史のみならず、世界諸地域の経済的統合過程と多様な社会構造に関心を抱く多くの方に読まれ吟味されるべき比類なき著述である。

擱筆するにあたり、本書の内容は具体的かつ明確であり文章も平易であるにもかかわらず、重要な論点の見落としや誤解・誤読が多々あることを危惧している。著者ならびに読者のご教示ご海容を乞う次第である。

注

（1）J・R・ヒックス（新保博・渡辺文夫訳）『経済史の論理』（講談社、一九九五年）、一一〇～一一一頁。

（2）劉大鵬『退想斎日記』（山西人民出版社、一九九〇年）、一九一八年七月一五日の記事。

（3）岸本美緒『清代中国の物価と経済変動』（研文出版、一九九七年）、二四四頁を参照。

（4）石原潤『定期市の研究―機能と構造―』（名古屋大学出版会、一九八七年）、第12章。

（5）その期間と額については、注（3）前掲書二四二～二四四頁を参照。

（6）「比来物貴、正緣小鈔希少」「如初時直三五分物、遂増為一錢」（程鉅夫『雪楼集』巻一〇、民間利病「江南売買微細宜許用銅錢或多置零鈔」）。

（7）J・M・ケインズ（小泉明訳）『貨幣論Ⅱ　貨幣の純粋理論』（東洋経済新報社、一九七九年）、一一九頁。

（8）注（3）前掲書二〇～二二頁を参照。

（9）アダム・スミス（水田洋ほか訳）『法学講義　1762～1763』（名古屋大学出版会、二〇一二年）、四〇二頁。

（London and New York: Routledge, April 9, 2020. 241 × 159mm, pp. viii + 213, £120）

（まえむら　よしゆき　琉球大学教育学部准教授）